

田原本町埋蔵文化財
調査年報

1997年度

7



一
九
九
八

田原本町教育委員会



例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が1997年度（平成9年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要報告書を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文に記載された遺構の記号については、SD が溝を、SK が土坑を、SR が流路を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数で表す。
5. 本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』（木耳社）による。
6. 調査、遺物整理にあたって、石野博信、市毛 眞、井口喜晴、今津節生、金関 毅、河上邦彦、小泉武寛、近藤喬一、佐原 真、清水眞一、高橋照彦、辰巳和弘、巽淳一郎、塙田良道、寺沢 薫、難波洋三、樋口隆康、松村恵司、森 浩一諸氏より多大なご教授を賜った。また、Colum 7 の写真については、アサヒグラフ（熊谷武二氏撮影）から提供を受けた。記して感謝の意を表します。
7. 本文の執筆は各調査担当者があたり、編集は清水琢哉が行った。

目 次

I.	1997年度の概要	1
II.	発掘調査の概要	
(1)	唐古・鍵遺跡 第64次調査.....	5
(2)	唐古・鍵遺跡 第65次調査.....	6
(3)	唐古・鍵遺跡 第66次調査.....	10
(4)	唐古・鍵遺跡 第67次調査.....	12
(5)	八尾九原遺跡 第2次調査.....	13
(6)	矢部南遺跡 第2次調査.....	14
(7)	阪手東遺跡 第1次調査.....	16
(8)	保津・宮古遺跡 第19次調査.....	17
(9)	保津・宮古遺跡 第20次調査.....	18
⑩	羽子田遺跡 第8次調査.....	20
⑪	羽子田遺跡 第9次調査.....	21
⑫	羽子田遺跡 第10次調査.....	22
⑬	羽子田遺跡 第11次調査.....	23
⑭	羽子田遺跡 第12次調査.....	26
⑮	羽子田遺跡 第13次調査.....	27
⑯	小坂樺木遺跡 第1次調査.....	28
⑰	柿ノ森遺跡 第1次調査.....	30
⑱	柿ノ森遺跡 第2次調査.....	31
⑲	多新堂遺跡 第2次調査.....	32
⑳	秦庄遺跡 第2次調査.....	33
㉑	田原本寺内町遺跡 第1次調査.....	34
㉒	田原本寺内町遺跡 第2次調査.....	36
III.	試掘調査・立会調査の概要	37

I. 1997年度の概要

1997年度の田原本町の発掘調査件数は、過去最高となる22件にのぼった。このうち、開発行為に伴う事前調査として行われたものが21件、重要遺跡緊急確認調査として行われた学術調査が1件である。

開発に伴う事前調査21件のうち、7件は町の公共事業関連でおもに用排水路などの農業基盤整備に伴う事業であり、細長いトレンチ調査を中心であった。他の6件は国庫補助金を受けた個人住宅等の建築に先立つ調査である。個人住宅の建築にあたっては、阪神大震災の影響で耐震性を考慮した地盤改良や改良杭がなされが多くなってきており、このため、調査も増加傾向にある。残る民間開発8件のうち、羽子田遺跡での分譲住宅・共同住宅の開発に伴う調査が6件を占めた。田原本駅北側の田原本小学校付近での住宅開発が重なったためである。羽子田遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期の集落と古墳時代前期から後期にかけての古墳群等の複合遺跡であり、その実態が不明のまま市街地になっており、早急に遺跡の性格を把握する必要性に迫られている。

さて、1997年度の発掘調査では、縄文時代から近世に至る各時期で成果が得られた。なかでも重要な成果の得られた調査について簡単に触れておく。

弥生時代の成果としては、唐古・鍵遺跡、矢部南遺跡の各調査がある。1996年度から継続して行われている唐古・鍵遺跡の重要遺跡緊急確認調査（第65次調査）では、青銅器の鋸造に関連するとみられる炉跡状の遺構が検出された。これまでにも、唐古・鍵遺跡の東南部において鋸造関連遺物が多数出土していたが、今回の調査によって初めて鋸造遺構が検出され、本遺跡において青銅器の鋸造がおこなわれていたことがほぼ確実となった。このほか、唐古・鍵遺跡北端の第66次調査において、弥生時代の河道から前期弥生土器と縄文晩期の凸帯文深鉢が共伴した。これまでの調査においても、凸帯文土器は唐古・鍵遺跡から十数片出土していたが、混在状況を呈していた。このような状況の中、本調査での出土状態は良好と考えられることから、唐古・鍵遺跡の成立を考える上で重要である。

田原本町南部に位置する矢部南遺跡第2次調査において、2基の方形周溝墓を検出した。この周溝内からは、生駒西麓産の細頸壺などを含む供獻土器が良好な状態で出土している。また、調査地の南東300mには弥生時代前期から中期の多遺跡が存在しており、周辺の遺跡の状況から多遺跡の墓域の可能性が高い。

古墳時代の成果としては、羽子田遺跡の各調査がある。第11次調査において古墳の周濠から盾持人の頭部とみられる人物埴輪が出土した。調査地は国指定重要文化財となっている牛の埴輪出土地点に接してあり、この牛の埴輪も今回検出した古墳に伴うものであった可能性が極めて高くなかった。

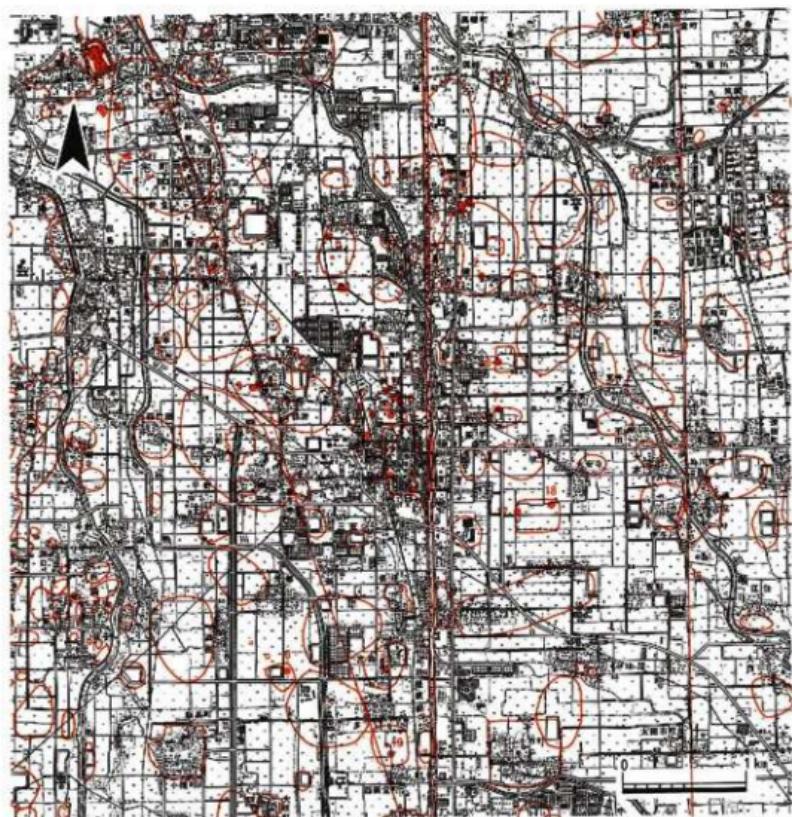
中・近世の成果としては、柿ノ森遺跡第2次調査・小阪榎木遺跡第1次調査・田原本寺内町遺跡第1次調査で成果が得られた。

柿ノ森遺跡は、「多門院日記」にも登場する「柿森」氏の居館推定地で、今年度に初めて調査が行われた。その結果、第2次調査で16世紀ごろの大溝を検出し、柿森氏の実在性を初めて検証する材料を得た。

小阪榎木遺跡は、周囲の水田から一段高い畠地があり、中世豪族居館の存在が推定されていた。ただし、文献からは該当する氏族を知ることはできない。調査では大溝と井戸が検出されたが、これは東側隣接地に残る一段高い畠地を囲う環濠となる可能性が高い。

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 57条の2	発掘通知 57条の3	98条の2		発掘	試掘	立会	計
1997年度	31	14	23	通知文 実施分	25 22	3	20 17	45 42



田原本町の道路と発掘調査地点 (1 : 40,000)

第2表 1997年度発掘調査一覧表

調査名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1 唐古・鍵	第64次	田原本町唐古 528-2他	辻 敏明	個人住宅 の建築	1997. 7. 8 ~ 7. 25	99m ²	弥生・近世	豆谷和之	国庫補助事業
2 唐古・鍵	第65次	田原本町 鍵171-1, 172	田原本町	重要遺跡 確認緊急 開発	1997. 7. 29 ~ 98. 3. 31	545m ²	弥生・古墳	藤田三郎 豆谷	国庫補助事業
3 唐古・鍵	第66次	田原本町 唐古528-1他	安井克昌	青空駐車 場	1997. 9. 16 ~ 10. 11	152m ²	弥生・近世	豆谷	受託事業
4 唐古・鍵	第67次	田原本町 鍵333-1	安井克昌	個人住宅 の建築	1997. 9. 24 ~ 10. 3	34m ²	弥生	豆谷	国庫補助事業
5 八尾九原	第2次	田原本町八尾 203-2	森島 治	個人住宅 の建築	1998. 2. 17 ~ 2. 24	75m ²	彌文	豆谷	国庫補助事業
6 矢部南	第2次	田原本町 矢部349-1 南隣接地他	田原本町	水路改修	1997. 12. 10 ~ 12. 24	425m ²	弥生	豆谷	産業振興課
7 取手東	第1次	田原本町取手 223-4他	田原本町	道路建設	1997. 11. 20 ~ 11. 28	300m ²	弥生	豆谷	都市計画課
8 保津・宮古	第19次	田原本町 宮古131-1他	石橋亦史	共同住宅 の建築	1997. 10. 13 ~ 10. 24	66m ²	古代・中世	清水琢哉	受託事業
9 保津・宮古	第20次	田原本町 宮古131-14 南側道路他	田原本町	水路改修	1997. 12. 9 ~ 98. 1. 23	160m ²	彌文・弥生 古墳	清水	産業振興課
10 羽子田	第8次	田原本町 新町44-1	福栄住宅 (株)	分譲住宅 の建築	1997. 5. 12 ~ 5. 22	105m ²	弥生・古墳	清水	受託事業
11 羽子田	第9次	田原本町 392-1他	金星 敦	共同住宅 の建築	1997. 7. 24 ~ 8. 5	55m ²	古墳	豆谷	受託事業
12 羽子田	第10次	田原本町新町 212-3, 375-1	見和開発 (株)	分譲住宅 の建築	1997. 8. 18 ~ 9. 18	620m ²	古墳	豆谷	受託事業
13 羽子田	第11次	田原本町 379-3, 382-3	辰巳喜代 司	分譲住宅 の建築	1998. 1. 8 ~ 1. 28	180m ²	古墳	豆谷	受託事業
14 羽子田	第12次	田原本町 新町61-1	谷村昭二	分譲住宅 の建築	1998. 2. 4 ~ 2. 10	113m ²	古墳・古代 豆谷	藤田 豆谷	受託事業
15 羽子田	第13次	田原本町 298-1他	北浜ビル ド(株)	分譲住宅 の建築	1998. 3. 2 ~ 3. 16	260m ²	古墳・中世	豆谷	受託事業
16 小坂樺木	第1次	田原本町 小坂366	吉谷光男	農業用倉 庫の建築	1998. 2. 18 ~ 3. 17	80m ²	中世	清水	国庫補助事業
17 桜ノ森	第1次	田原本町 阪手42-2 東隣接地他	田原本町	水路改修	1997. 12. 3 ~ 12. 4	115m ²	近世	豆谷	産業振興課
18 桜ノ森	第2次	田原本町 大安寺271-1 南隣接地他	田原本町	水路改修	1998. 1. 26 ~ 2. 6	150m ²	弥生・近世	清水	産業振興課
19 多薪堂	第2次	田原本町多薪 149-1他	福西暉二	個人住宅 の建築	1997. 11. 25 ~ 12. 5	120m ²	中世	清水	建設課
20 長庄	第2次	田原本町宮森 149-1他	福西暉二	個人住宅 の建築	1998. 2. 10 ~ 2. 16	30m ²	中世	清水	国庫補助事業
21 田原本町内 町	第1次	田原本町556他	田原本町	イベント 会場建設	1997. 7. 28 ~ 9. 5	274m ²	中世・近世	清水	都市計画課
22 田原本町内 町	第2次	田原本町38	辰巳千邦	個人住宅 の建築	1998. 1. 20 ~ 1. 26	70m ²	近世	豆谷	国庫補助事業

田原本寺内町遺跡では、中世の大溝と、近世から近代に続く大溝を検出した。中世の溝は、寺内町形成以前の前身造構とみられるが、その性格は明らかでない。調査の結果、寺内町の区画は、中世の区画を踏襲しつつ、西側に拡張する形で形成されていることが判明した。

(藤田・清水)



寺内町遺跡の絵地図『大和国十市郡田原本村図』(福岡洋介氏蔵1933年)
写真上で北。左下に津島神社が描かれている。調査で検出した大溝も見える。写真中央には、本誓寺・淨照寺、右上には陣屋がある。

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第64次調査

所在地 田原本町大字唐古528-2他

調査面積 92m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1997.7.8~7.25

遺物量 15箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高47~49mの沖積地に立地し、弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万m²に達する。今回の調査地は遺跡の北端に位置し、周辺部では過去に第36次、第45次の2件の調査が行われている。これらの調査では、弥生時代の遺構は確認されていないが、第45次調査において、弥生時代前期の土器を含んだ自然河道が検出されている。弥生時代の遺構が未検出であるのに対し、第36次、第45次調査では中・近世の大溝が検出されている。

検出遺構

- ・弥生時代前期：自然河道1条
- ・近世の遺構：大溝2条、小溝6条

出土遺物 弥生時代前期の自然河道(SR-101)は、調査区の大半に及んでいる。しかし、前期弥生土器片がまとまって出土するのは、調査区の北東隅である。弥生時代前期の自然河道の本流は本調査区の北東側、第45次調査区付近であったと考えられる。

近世屋敷地を囲んでいたと考えられる大溝(SD-01)からは、多数の瓦や染付茶碗が出土した。なお、南肩付近からは、羽釜などが出土しており、溝の掘削時期が中世の末まで遡る可能性がある。その他、調査区の中央からやや北よりで検出した小溝(SD-07)の中肩からは多数の土器片が出土した。

まとめ 本調査区より出土する弥生土器は前期のものが大半である。このことから、本地区周辺は弥生中後期の環濠の範囲外と考えられる。

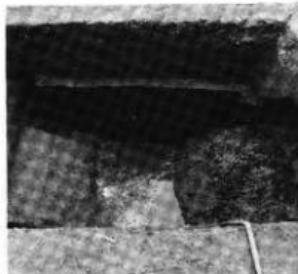
また、本調査区の南東側の一段高くなつた畑が、近世屋敷地の本体であろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 近世大溝完掘状況 (東から)

(2) 唐古·鍵遺跡 第65次調査

所在地 田附本町大字解[7]=1他

調查原因 重要遺跡確認報告調查

調査期間 1997.7.29~1998.3.31

調查面積 545 品

相当者 藤田三郎・豆谷和之

遺物量 100箱

位置・環境 今回の調査地にあたる東南部では、ムラを開む中期から後期にかけての環濠3条と環濠に打ち込まれた橋脚から出入り口が確認されている。また、第33次調査地が南地区の中心的な場所であったことも、これまでの成果から判明してきている。

- ・弥生時代中期前半：土坑・大溝2条
 - ・弥生時代中期後半：土坑・溝・竪穴住居
～後期前半 井戸・炉跡・壺棺1基
 - ・弥生時代後期後半：井戸・方形周溝・壺棺
 - ・古墳時代後期 ；柱穴

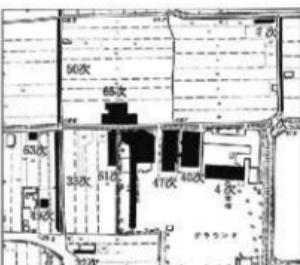
出土遺物 多量の弥生土器や石器、青銅器铸造関連
遺物（土製鋳型外枠・送風管・取瓶？・小銅
塊）、銅鐵、銅鐸形、鳥形土製品、広片口鉢、
ヒスイ玉、卜骨、広獣、弓

ま と め 今回の調査は、南地区的縄濠からやや内部に位置する。中期初頭では、南地区を囲む大溝2条、中期中葉では堅穴住居の柱穴や排水溝を検出した。特に堅穴住居は、壁の立ち上がりを本遺跡で初めて確認することになった。

中期後半の爛跡は、青銅器鑄造に関係すると考えられ、弥生時代のものとしては、類例を知らない。この周辺では被熟土器片も多く出土しており、青銅器の工房跡と推定される。

弥生時代後期後半には、方形周溝遺構を検出した。周溝は東南部側で切れており、陸橋部になると考えられる。この溝の上層から大量の完形土器が出土した。また、この遺構の西南2mの所では、広口壺を転用した壺棺2基を検出している。このことから、方形周溝遺構は墓の可能性が高いと考えられる。しか

し、これが方形周溝墓とするならば、環濠内部に墓が存在することになり、問題も残る。



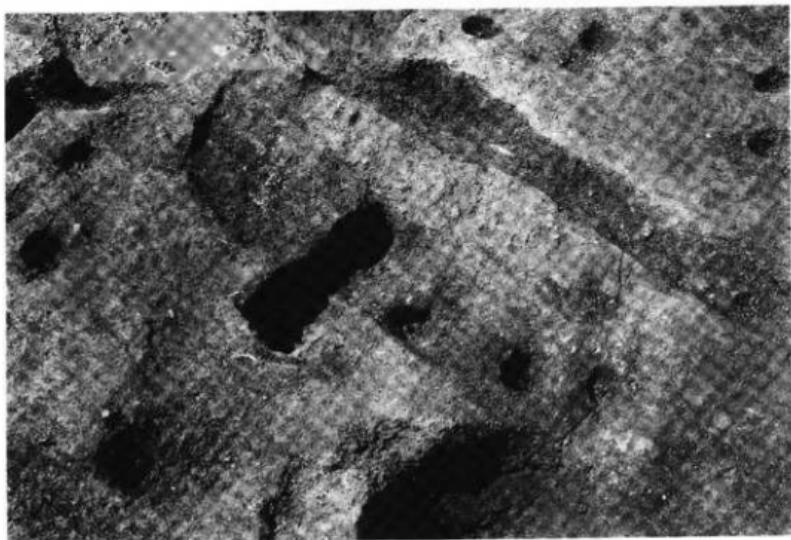
1 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景(東から)



3. 方形周溝造構



青銅器鋳造に伴う炉跡

今回の調査で、特に注目されるのは青銅器の鋳造に関する遺物と炉跡状構造である。これらの遺物は、ムラの東南部にあたる第3・40・47・61次調査地で集中的に見つかっている。その中心は第3次調査地で、最も多く良好なものが出土し、本地を中心におおよそ50mの範囲に拡がりをみせる。しかし、これらはいずれも溝などに廃棄した状態で出土しており、本来存在した工房には伴っていない。

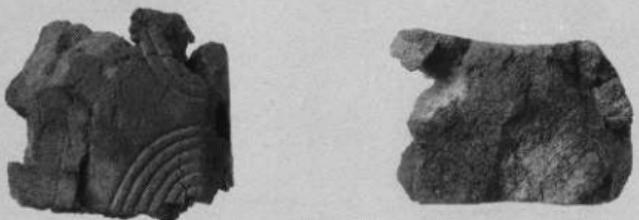
今回の調査においても、これまで出土したような土製鋳型外枠や送風管などが約40点出土した。ただし、今回の調査では、中期末（大和第IV様式）に漸る可能性があるものを数点含んでいる。このことから、唐古・鍵遺跡における青銅器の鋳造が、これまで後期初頭の一時期に想定していたのが、大和第IV様式末から大和第V様式にかけておこなわれていたと考えられるようになってきた。

もう一点の成果は、造構として炉跡状構造を検出したことがある。この造構は、非常に堅く焼きしまった焼土面を有するもので、その部分は長さ45cm、幅11~16cm以上の長方形の形態を有するものである。この焼土面は、長軸92cm、短軸75cm、深さ14cmの土坑内に作られており、炉の下部構造と推定される。このことから炉は、長方形の形態を呈する地上炉に復元できる可能性がある。今回の調査で、初めて弥生時代の青銅器の鋳造技術の一端が明らかにされた。

Colum

①

唐古・鍵遺跡
第65次



第3次



第65次

石製の銅鐸鋳型

唐古・鍵遺跡の調査では、第3次調査において多種類の土製鋳型外枠が多量に出土し、また、それらとともに石製の銅鐸鋳型も1点出土した。その銅鐸鋳型は、重弧文の文様をもつ銅鐸鋳型と推定されている。その後の第61次調査においても土製鋳型が出土したが石製の鋳型はなかった。しかし、今回の第65次調査において、第3次調査で出土した鋳型と同一個体と考えられる石製鋳型を検出した。

今回の鋳型によって、おぼろげであるが銅鐸の全容を把握するに至った。推定される銅鐸は、高さ40cm代で4区袈裟襷文銅鐸と考えられる。袈裟襷文の内部には、上下対称に重弧文を配する。2点の鋳型は、いずれも銅鐸の身部分で、第3次調査分が上段の袈裟襷文の内部にあたる破片、第65次調査分が下段の袈裟襷文部分の破片と推定される。現在のところ、この鋳型で鋳造された銅鐸は見つかっていない。

Colum

②

唐古・鍵遺跡
第65次



ト骨を伴う井戸

第65次調査において、古いに使ったト骨が6点出土している。その内、5点が弥生時代後期初頭（大和第V様式）の井戸2基からの出土である。井戸SK-134は、長軸1.8m、短軸1.3m、深さ2.2mを測る大型の素掘りの井戸である。この井戸からは、最下層、下層、上層の各層において完形土器を含む良好な一括廃棄遺物が出土している。最下層では完形広口壺とト骨、下層では完形壺3点・ト骨2点・横梯など、上層では完形・半完形土器や土製鋳型外枠の破片などが出土した。また、もう一つの井戸は、SK-134の北2.5mで検出した井戸で、新旧2基（新SK-105、旧SK-115）の井戸から成っている。SK-115では最下層から完形の短頸壺とト骨2点、イノシシ下顎骨などが、SK-105上層からは送風管や土製鋳型外枠の破片が出土した。

この3つの井戸は、出土した土器から後期初頭のものであり、井戸SK-134→SK-115→SK-105の変遷が考えられる。本調査区が中期後半から青銅器鋳造の工房区であったと推察されることから、ト骨を伴うこれらの井戸は、工房に付属する井戸の可能性がある。

Colum

3

唐古・鍵遺跡

第65次

(3) 唐古・鍵遺跡 第66次調査

所在地 田原本町大字唐古528-1他

調査原因 青空駐車場に伴う造成

調査期間 1997.9.16~10.11

調査面積 152m²

担当者 豆谷和之・清水琢哉

遺物量 30箱

位置・環境 今回の調査地は遺跡の北端に位置し、周辺部では過去に第36次、第45次、第64次の3件の調査が行われている。これらの調査のうち、第45次、第64次調査では弥生時代前期の自然河道を検出している。第64次調査では自然河道の南岸を検出しており、南東から北西へと流れることが確認された。弥生時代中期および後期については、わずかな土器片が出土したのみで、遺構はなかった。これらの調査から、この周辺は唐古・鍵ムラの居住区外であることが予想された。

- 検出遺構**
- ・弥生時代前期：自然河道1条
 - ・弥生時代中期：自然河道1条
 - ・近世：大溝1条、井戸1基

出土遺物 SR-201は調査区の人半に広がる弥生時代前期の自然河道である。その埋土は大きく上・中・下の三層に分かれ。その下層の灰白色砂からは完形の壺が出土した。また、河床直上から、弥生前期の彩文壺破片とともに繩文晩期終末の凸帶文深鉢破片が出土している。上層からは、前期新段階の土器が出土している。このSR-201埋没後、その上面に堆積した砂屑がSR-101である。弥生時代中期前半の広口長頸壺が完形で1点出土している。

まとめ 弥生時代前期の遺物を多量に含んだ自然河道が特筆される。その埋土の堆積状況や遺物の包含状況から、第1次調査で検出された南方砂槽と同一河道跡であると想定されよう。また、この最下層からは前期弥生土器とともに晩期繩文土器が出土している。繩文から弥生への転換を考えいくうえでの貴重な資料である。



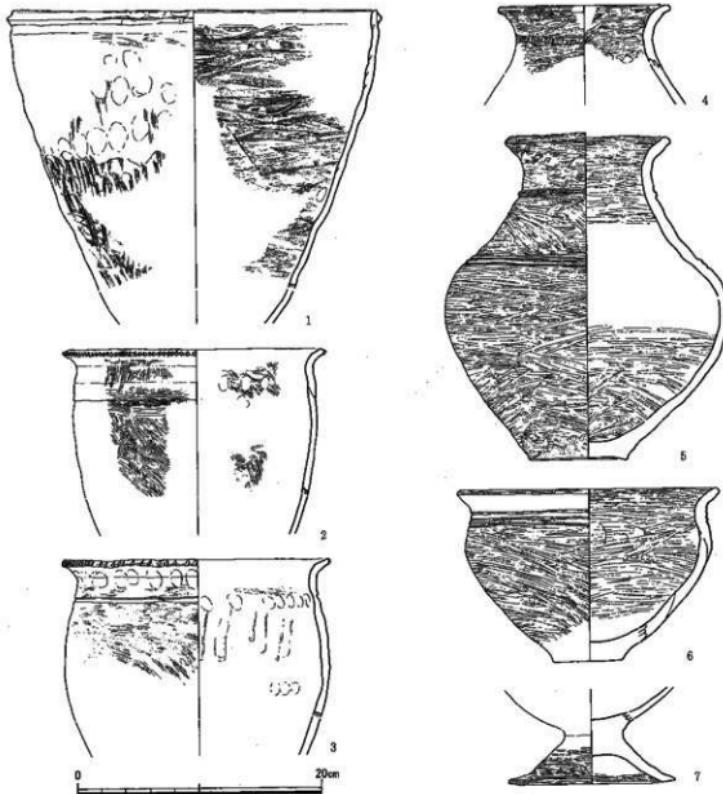
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 弥生前期自然河道の堆積状況



3. 弥生前期壺の出土状況



奈良県最古の前期弥生土器

河道最下層遺物 繩文時代晚期終末の凸帶文深鉢（1）と、弥生時代前期初頭の彩文壺（4）が出土した。凸帶文深鉢は、口縁部から底部にむかってすぼまつた砲弾形の器形であり、口縁部には一条の凸帯を巡らせる。外面には縦方向、内面には横方向の条痕が施されている。彩文壺は口頸部界に細い2条の沈線を施し、その沈線間を刺突文で充填している。頸部には、彩文を施す。

河道下層遺物 奈良県内においては希有な、セツのわかる古い前期弥生土器群である。壺（2・3）は、胴上半に段をもつ。その他に、胴上半に2条の沈線を施すものがある。壺（5）は、頭部に削山突帯をもつ。鉢（6）は、胴部に膨らみをもち、頸部に三条の沈線が施される。高坏（7）は短脚である。

Colum

4

唐古・鍵遺跡
第66次

(4) 唐古・鍵遺跡 第67次調査

所在地 田原本町大字唐古333-1

調査面積 34m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1997.9.24~10.3

遺物量 7箱

位置・環境 今回の調査地は遺跡の北端に位置し、周辺部では過去に第36次、第45次、第64次、第66次の4件の調査が行われている。これらの調査から、本調査区周辺には弥生時代前期の自然河道が南東から北西方向に枝分かれしながら流れていることが判明している。また、弥生時代中期と後期の遺構の検出は、皆無である。

- 検出遺構**
- ・弥生時代前期：土坑1基
 - ・弥生時代中期：自然河道1条
 - ・中・近世：溝5条

出土遺物 弥生時代前期の土坑(SK-201)は、弥生時代中期の自然河道(SR-101)に西肩を切られていた。上層には完形の壺形土器1点や多くの土器片、炭灰や焼土を含んでいた。弥生時代中期後半の自然河道(SR-101)からは、完形あるいは半完形の中後期弥生土器が5点出土した。第1次(唐古池)調査で検出された北方砂層に繋がるものと予想される。

まとめ 本調査区において弥生時代前期の土坑を検出した。唐古・鍵遺跡の北端調査において、初めての遺構検出となった。また、弥生時代前期の遺構が検出されたことによって、前期の段階には現在予想する集落範囲よりも居住域が拡がっていたと想定される。

特筆すべき事項として、北方砂層と考えられる自然河道(SR-101)の東肩を検出したことがあげられる。中期後半の粗砂層とともに、それ以前の河道堆積も確認した。北方砂層はそのまま北流し、清水塙遺跡の自然河道に繋がると想定してきたが、今回検出した自然河道はその推定線上にはほぼ一致するものである。



2. 北方砂層堆積状況 (北から)



3. 調査地南壁土層断面

(5) 八尾九原遺跡 第2次調査

所 在 地 田原本町大字八尾203-2

調査面積 75m²

調査原因 農家用住宅の建築

担当者 豊谷 和之

調査期間 1998.2.17~2.24

遺物量 約1箱

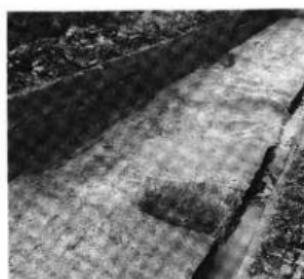
位置・環境 八尾九原遺跡は、昨年度の第1次調査によって、初めて遺跡として認知された。溝や土坑などの弥生時代中期後半の遺構、古墳時代後期の古墳周濠を検出した。特に、弥生時代中期後半の遺構から出土するのは、いずれも大和第IV様式の土器である。これらの土器には、下向きの渦巻き模様をもつ建物や魚などの絵画土器が含まれていた。弥生集落としては、小規模で短期的なものであろう。弥生時代中期後半、八尾九原遺跡は清水風遺跡とともに、唐古・鍵遺跡の衛星集落の一つであったと考えられる。

今回、第一次調査の北側、三宅町との境で農家用住宅の建築が計画されたため、発掘調査を行った。

検出遺構 • 時期不明：土坑状遺構3基、溝状遺構2条

出土遺物 第1次調査において、弥生時代および古墳時代の遺構検出面となった黒褐色粘土が、本調査地まで拡がっていた。この黒褐色粘土中から、石礫が単独出土した。形態から縄文時代のものと考えられる。また、黒褐色粘土を除去した、明黃灰色粘質土の上面で、土坑状遺構・溝状遺構を検出したが、遺物は出土していない。埋土が細かくなっている地山層にちかくなる特徴から、風倒木痕と考えられる。

まとめ 八尾九原遺跡は、今回で2度目の調査であり、未だ不明な点も多い。今回の調査は、遺構・遺物ともに貧弱な内容であった。八尾九原遺跡の範囲が、今回の調査地まで拡がらないことが判明した。八尾九原遺跡の北限は、第1次と第2次調査地の間にある東西の水路付近で、ほぼ定まったといえる。



(6) 矢部南遺跡 第2次調査

所在地	田原本町大字矢部349-1南隣接地他	調査面積	425m ²
調査原因	農業用水路改修	担当者	豆谷和之
調査期間	1997.12.10~12.24	遺物量	7箱

位置・環境 矢部南遺跡は田原本町の南端に位置し、周囲には团栗山古墳、多遺跡がある。県遺跡台帳には旧池のみが遺物散布地として登録されてきたが、周囲に削平された古墳の周濠が埋没している可能性があるため、昨年度より矢部南遺跡として調査を行っている。旧池の北西部で行った第1次調査では、顕著な遺構は検出していない。

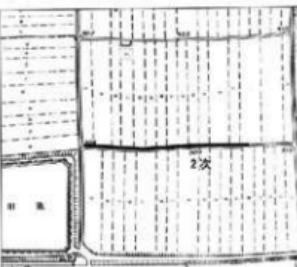
第2次となる今回の調査は旧池の東側、多遺跡から北西へ約100mの地点で、農業用水路改修に伴い行われた。

検出遺構 • 弥生時代中期：方形周溝墓2基（溝4条）溝2条

• 中世：素掘小溝4条、土坑2基

出土遺物 方形周溝墓(ST-101)の溝(SD-102)からは、供獻土器6点が出土した。うちわけは、広口壺・河内産の細頸壺・高环各1点が完形、大甕・大形細頸壺・広口壺各1点が半完形である。もう1基の方形周溝墓(ST-102)の溝(SD-103)からは、供獻土器5点が出土した。うちわけは、広口壺2点・広口壺・甕が完形、高环1点は脚部を欠損している。また、方形周溝墓の溝に流れ込んだ状態で、縄文時代晚期終末の凸帯文土器片がまとめて出土している。

まとめ 今回の調査で検出した主な遺構は、弥生時代中期中葉の方形周溝墓2基である。弥生時代における本調査区周辺は、墓域であったと推測される。現在のところ、この墓域に対する弥生時代の居住域として予想されるのは、多遺跡である。まとめた、縄文時代晚期終末の凸帯文土器片も注目すべき資料である。



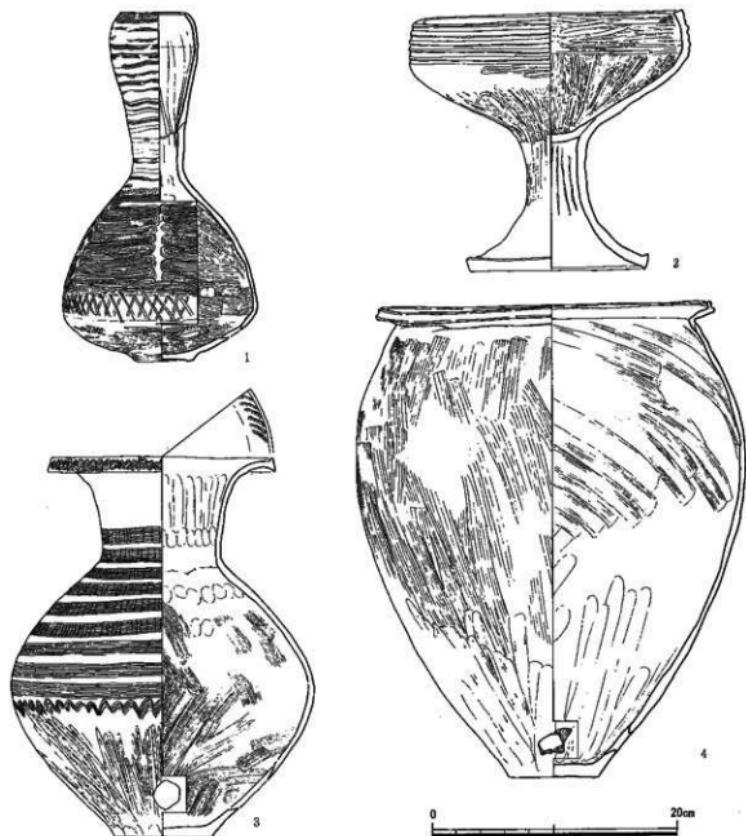
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. 供獻土器出土状況 (SD-102)



方形周溝墓に供えられた土器

ST-101出土土器 細頸壺（1）は、河内地域からの搬入品である。口頸部には櫛描直線文、胴部には櫛描による縦型の流水文が配される。胴下半部に穿孔をもつ。高杯（2）は、内傾する口縁部をもち、口縁部外面には5条の凹線文が巡らされる。脚部はなだらかに拡がり、内面にはケズリ調整は認められない。

ST-102出土土器 広口壺（3）は、よくしまった頸部に大きく拡がる口と、球体の胴部をもつ。頸部から胴部上半にかけて6帯の簾状文、3帯の直線文、波状文を順に巡らせる。口縁端面には波状文、内面には櫛描刺突文を巡らせる。胴下半部に穿孔をもつ。壺（4）は、口縁上端部を強くつまり出す。胴下半部に穿孔をもつ。

Colum

5

矢部南遺跡
第2次

(7) 阪手東遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字阪手223-4他

調査面積 300m²

調査原因 都市計画道路改良工事

担当者 豆谷和之

調査期間 1997.11.20~11.28

遺 物 量 1箱

位置・環境 阪手東遺跡は、現阪手集落の東側にある阪手池を中心として、その東側にひろがる土器・須恵器の遺物散布地である。今回、阪手池の北側で都市計画道路の整備が行われ、道幅が拡幅されることになった。今回が阪手東遺跡における初めての調査である。

検出遺構

- ・弥生時代以前：自然河道1条
- ・弥生時代後期：落ち込み状遺構
- ・近世 : 素掘小溝

出土遺物 調査区東側で検出された自然河道からは、遺物が出土しておらず、弥生時代以前に溯源する河ではないかと考えられる。調査区中央付近において、浅い落ち込みのなかから、弥生時代後期前半の広口長頸壺が、横倒しになっていた状態で出土した。土圧で割れていたが、本来は完形品であったと考えられる。

調査区の西半で検出した素掘小溝からは、近世陶磁器片が出土しており、いずれも中世に溯源するものとは考えられない。

まとめ 阪手東遺跡は、今回が初めての調査となった。今回の調査は道路工事に伴うもので、遺跡の範囲内を東西に横断するトレッチを開けたことになった。その結果、地形は現在の阪手集落から東に向かって落ち込んでいくことが判明した。調査区全体から検出される遺物も少なく、本調査区周辺は遺構・遺物の希薄な地点と考えられる。

ただし、調査区中央付近の浅い落ち込みから検出した弥生時代後期前半の広口長頸壺はほぼ完形であり、供献土器の可能性も考えられる。弥生時代の墓域でありうることも想定し、周辺地域の調査に対応していく必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 中世素掘小溝の検出状況



3. 弥生後期壺の出土状況

(8) 保津・宮古遺跡 第19次調査

所在地 田原本町大字宮古131-1他

調査原因 共同住宅の建築

調査期間 1997.10.13~10.24

調査面積 66m²

担当者 清水琢哉

遺物量 9箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は標高約45~50mの沖積地に立地する。今回の調査地は現在の宮古集落の西側に位置し、古代道路の筋道の西側に隣接する。これまでの調査で、宮古集落周辺には中世集落が拡がり、筋道周辺では古代の遺構も散在することが明らかとなってきた。また、弥生時代後期の集落も宮古集落を中心広い範囲で確認されている。

検出遺構 古代の遺構としては、幅4m、深さ0.3mの南北西~南南東方向の溝が検出されている。その位置から、筋道の側溝とみられる。

中世の遺構としては、溝1条、土坑4基が検出された。南北方向の溝SD-51は、幅2.6m、深さ0.8mをはかる。SK-53は直径1.5m、深さ0.7mの井戸である。円形曲物を井戸枠に用いていた。SK-54も井戸とみられるが、SK-53とSD-51に切られるため、正確な規模は明らかでない。廃絶の際に竹を垂直に掘えて息抜きとしている。

出土遺物 SD-51を中心に完形の瓦器塊多数が出土した。また、SK-53からは曲物容器が1点出土した。時期は12世紀とみられる。

まとめ 今回の調査の結果、中世集落の拡がりを確認することができた。ただし、調査地は概乱が比較的深くまで及んでいたため、柱穴等の遺構はすでに削平されている可能性がある。

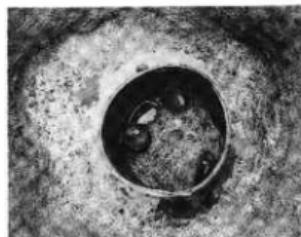
完形の瓦器塊が大量に出土したSD-51については、南側で隣接して行われた第20次調査区では検出されなかった。両調査区の間でL字形に屈曲している可能性が高い。筋道関連とみられる溝も検出されているが、土師器小片が出土したのみであり、詳細な時期を押さえることはできなかった。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（西から）



3. SK-53遺物出土状況

(9) 保津・宮古遺跡 第20次調査

所在地 田原本町大字宮古131-14南側道路他 調査面積 160m²
調査原因 水路改修 担当者 清水琢哉
調査期間 1997.12.9～1998.1.23 遺物量 10箱

位置・環境 今回の調査は、第19次調査の南側に隣接する東西方向の道路部分、総延長107mにわたっておこなった。

検出遺構 繩文時代の落ち込み（落ち込みI）、弥生時代の溝（SD-106）、古墳時代の土坑（SK-103）、古代の溝（SD-102）、中世の土坑（SK-102）、近世の土坑・溝などを検出した。

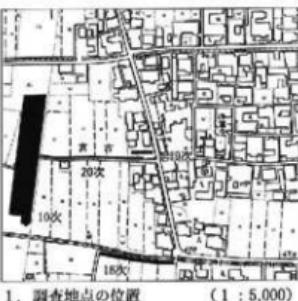
出土遺物 落ち込みIからは繩文後期の深鉢等が出土した。SD-106からは弥生時代後期の土器が多く出土した。SK-103からは古墳時代の須恵器等が、SD-102からは7世紀ごろの土師器・須恵器等が出土した。近世の土坑・溝からは多くの土師器・陶磁器・瓦等が出土した。

まとめ 今回の調査では、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と多様な時期の遺構・遺物を検出することができた。

繩文時代の集落は、南東100mの14次調査地点周辺に存在する可能性を考えられているが、今回の調査地周辺にも遺構の分布がみられた。

弥生時代後期の遺構としては、第10次・14次・18次で検出されているものと同一となる可能性の高い北西方向の溝が検出された。弥生時代後期の保津・宮古遺跡は散漫な集落が広い範囲に展開していることが予想されている。今回の調査では、当該時期の遺構はこの溝以外に顕著な遺構はみられなかった。

古墳時代後期～古代の遺構も調査地西側で検出されたが、遺構密度は低いようである。



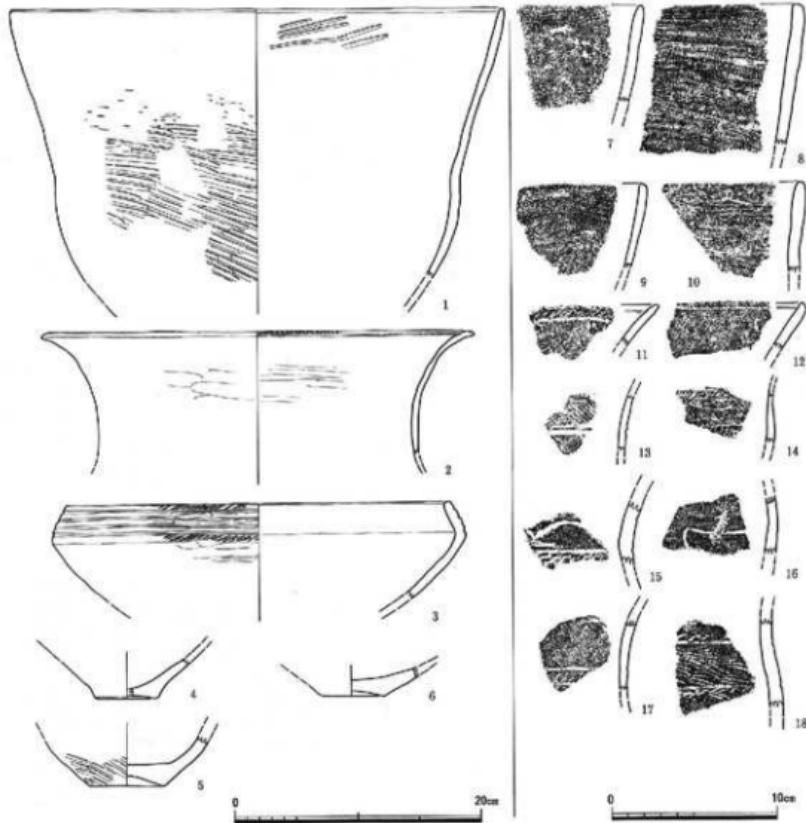
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景(西から)



3. SD-10完掘状況



縄文時代の 保津・宮古遺跡

Colum

6

保津・宮古遺跡
第14・20次

第20次の調査では、縄文時代後期の土器が少量出土した（1、2、4、9、15）。1、4、9は条痕文の深鉢で、1と4は同一個体とみられる。2は内外面を丁寧に磨いた深鉢で、口縁内面の沈線の外側にヘラ状の工具で刻み目を施す。15は磨消し縄文の小片である。

1995年度に行った第14次調査でも縄文土器が出土しているので併せて紹介する（3、5～8、10～14、16～20）。3、7、11は土坑SK-110出土遺物で、他は弥生～古代の遺構や包含層から出土したものである。これらの遺物は元住吉山式に位置づけられる。

(10) 羽子田遺跡 第8次調査

所在地 田原本町大字新町44-1

調査面積 105m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1997.5.12~5.22

遺物量 1箱

位置・環境 羽子田遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡は小室集落から新町・八尾にかけて南北900m、東西500mの拡がりをもつ。これまでの調査により、弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。

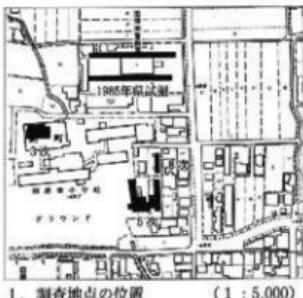
今回の調査地は、過去の周辺での調査成果から、弥生～古墳時代集落の辺縁部となることが予想されていた。

検出遺構 調査地全体が縄文時代後期の自然河道であった。河道の幅や深さは明らかでない。

弥生時代の遺構は、中期・後期の2時期がみられる。SK-103は弥生時代中期の浅い土坑で、調査区外に拡がるため規模は不明である。弥生時代後期の遺構としては、SK-101、102がある。いずれも、直徑1m、深さ0.7mで、井戸と考えられる。古墳時代の遺構としては、布留期の溝が1条検出された。北西～南東方向で、幅2m、深さ0.1mと規模は小さい。

出土遺物 SX-201からは、縄文時代後期の深鉢とみられる小片が1点出土している。また、SK-103からは弥生時代中期の土器片が、SK-101・102からは弥生時代後期の小片がそれぞれ出土しているが、量的には少ない。SD-101からは古墳時代前期の土器片が少量出土している。いずれの遺物も図化することのできない小片である。

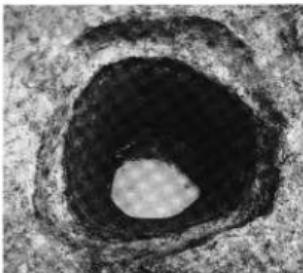
まとめ 今回の調査の結果、調査地付近にも弥生時代中期～古墳時代前期の集落が拡がることが確認された。ただし、調査地北半には当該期の遺構がみられないことから、本調査地が集落の北東端であると考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（北から）



3. SK-101完掘状況

(11) 羽子田遺跡 第9次調査

所 在 地 田原本町字西羽子田392-1他

調査原因 共同住宅の建築

調査期間 1997.7.24~8.5

調査面積 55m²

担当者 豆谷和之

遺物量 2箱

位置・環境 今回の調査地点は羽子田遺跡の中央西寄りにあり、田原本小学校のグランドで行った第1次調査、第2次調査地点からは道路を挟んで向き合う南北の位置にある。また、近接する保津・宮古遺跡では筋道に直交して派生する東西方向の道が推定されているが、本調査地はその推定線上にあった。

- 検出遺構**
- ・古墳時代後期：前方後円墳（？）1基
 - ・中世：溝2条
 - ・近世：素掘小溝

出土遺物 黒褐色土を検出面として、中近世の遺構を検出した。近世の遺構は、南北方向の素掘小溝である。中世の遺構は、平行する東西方向の2条の溝である。南側の溝では、杭列を検出している。この中近世の遺構面より下層において、調査区南端で三角形に掘り残された地山の黒褐色粘土を検出した。周囲は溝状に掘り込まれていた。前方後円墳の前方部隅の可能性が高い。周濠と考えられる部分からは、須恵器の壺瓶と短頸壺、柱状木製品が出土した。柱状木製品はその下端を両側から削りを入れて尖らせ、杭状に加工していた。また、上端は両側から削り込んで扁平化させ、楕円のホゾ穴を例り貫いている。何らかの建築部材、あるいは埴丘に立て並べた木製埴輪の柱材の可能性が考えられる。なお、須恵器は6世紀前半の特徴をもつ。

ま と め 当初、検出が期待された古代道路、およびそれに該当するような遺構は認められなかった。後期古墳を切り込む自然河道の堆積層があり、その上層から奈良時代と考えられる須恵器や土師器が一定量出土している。付近に、何らかの古代遺構が埋没しているのであろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 中世遺構完掘状況（南から）



3. 古墳周濠完掘状況（西から）

(12) 羽子田遺跡 第10次調査

所在地 田原本町大字新町212-3,75-1

調査面積 620m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1997.8.18~9.18

遺物量 11箱

位置・環境 今回の調査地点は遺跡範囲の西端に位置し、そのすぐ北側は第7次調査地点にある。第7次調査では、古墳時代後期の方墳や古墳時代前期の円筒埴輪が出土している。

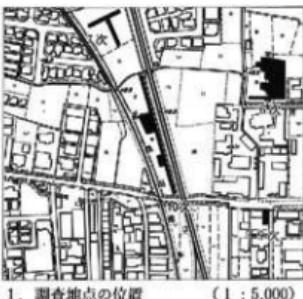
検出遺構

- 古墳時代前期：溝2条（SD-101, SD-106）
土坑1基（SK-101）
- 古墳時代後期：古墳周濠（SD-103, SD-105）
溝2条（SD-104, SD-107）
- 時期不明：
溝1条（SD-102）
河川跡1条

出土遺物 古墳時代前期の円筒形や朝顔形の埴輪が多数出土した。しかし、それが伴った古墳埴丘、あるいはその周濠を明らかにすることはできなかった。一方においては、同時期の土坑や土器片を検出しておらず、居住区があったことも想定される。

古墳時代後期の古墳周濠SD-103からは、須恵器の环が身と蓋の2セット、広口壺が1点出土した。その形態から5世紀末の年代が与えられる。陸橋部によって途切れているが、SD-103とともに同じ古墳を巡っていたと考えられる周濠のSD-105からは、土師器壺の上半部が出土している。

まとめ 古墳時代前期の埴輪は、本調査区および第3次調査区、第7次調査区で検出されている。これらの埴輪は、複数基の古墳に樹立されていたと見なすべきであろう。とすれば、古墳時代前期に埴輪の供給を受ける古墳群が、奈良盆地中央に存在していたということになる。羽子田古墳群では、中期の空白期間をおいて後期古墳群が形成されている。前期古墳と後期古墳の系譜関係が問題となろう。



2. 第1区調査地全景（南から）



3. 第2区調査地全景（南から）

(13) 羽子田遺跡 第11次調査

所 在 地 田原本町379-3、382-3

調査面積 180m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1998.1.8 ~ 1.28

遺物量 8箱

位置・環境 羽子田遺跡は、明治30年の病院建設に伴い水田から、牛形埴輪をはじめとする人物・橋などの形象埴輪とともに多数の円筒埴輪が出土したこと、古くから知られている。しかし、明治の出土ということもあって、その出土地点の詳細な位置は判らなくなってしまった。埴輪出土土地の字名「東羽子山」から、おそらく現在の田原本幼稚園の敷地東側であろうと推測される程度であった。

今回、牛形埴輪出土土地と推定される田原本幼稚園敷地の東隣接地で、アパートの建築が計画されたため、調査を行った。

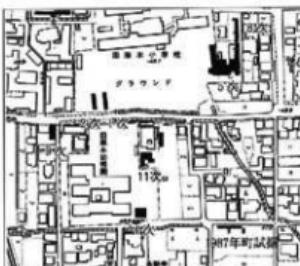
検出遺構 • 古墳時代後期以前：溝（SD-102、103）、自然河川跡（SR-201）

• 古墳時代後期：古墳周濠

出土遺物 幅約6mの古墳周濠（SD-101W、101E）を検出している。SD-101Wの下層から人物埴輪頭部や家形埴輪、有頭棒状木製品が出土した。人物埴輪は、その大きさや入れ墨、被り物から柄持人になると考られる。頭部で、成形を終了しており柄部への差し込み式になると考えられる。

時期決定の手掛かりとなる円筒埴輪は川西編年のV期、須恵器は田辺編年のMT-15~TK-10に位置づけられ、6世紀前半の年代が与えられる。なお、近世粘土採掘坑の上面から、金環1個が出土している。

まとめ 明治30年に牛形埴輪などが出土して以来、初めて本地に調査のメスが入り、古墳の周濠や柄持人埴輪を確認できたことは大変意義深い。しかし、古墳の墳形や規模、牛形埴輪の出土地点の特定、形象埴輪の配置など課題も多く残すことになった。



3. 柄持人埴輪の出土状況



明治30年出土の埴輪

明治30年に羽子田遺跡から出土した埴輪では、重要文化財に指定された牛形のものがよく知られている。しかし、高橋健自氏の報文には、それ以外の埴輪が図示されている。これらは、牛形埴輪とともに東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）へ寄託され、その後、戦火を避けて奈良国立博物館に移管された。田原本町教育委員会では、羽子田1号墳の再発掘を契機に、奈良国立博物館へ牛形埴輪を除いた埴輪の返却を申請した。

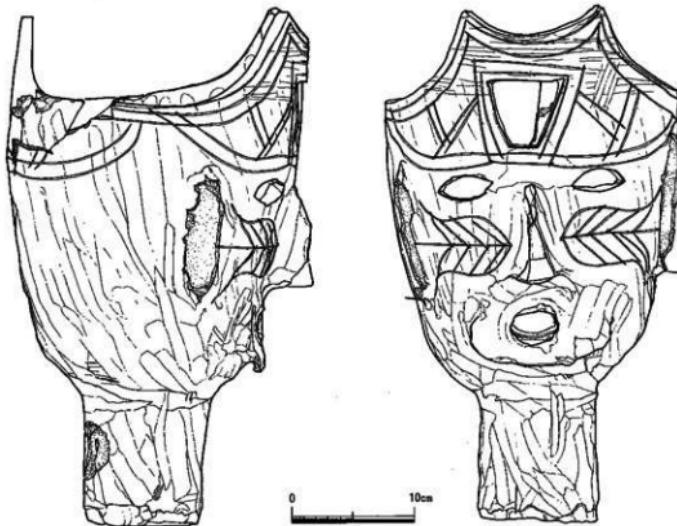
返却された埴輪は6個体であった。これらの埴輪を検討した結果、組み合わせ式の楯持人埴輪2（頭部1、楯部1これらは一体になると推定）、一体式の楯持人埴輪2、組み合わせ式の楯持人埴輪か？1、蓋形埴輪1であることが判明した。

今回の発掘成果も加えれば、羽子田1号墳からは、楯持人埴輪7（組み合わせ式3、一体式3、不明1）、牛1、蓋1以上、家1、石見型楯？、円筒埴輪多數が出土している。特に、楯持人埴輪における組み合わせ式と一体式のセットは、本古墳以外の例を聞かない。

Colum

7

羽子田遺跡
第11次



亡き主人を守る 楯持人埴輪

上図の人物埴輪の頭部は、被り物や入れ墨、差し込み式の頭部などの特徴から、楯持人埴輪と考えられる。顎の先から被り物の先まで約32cmあり、差し込み式の頭部を加えると約44cmにもなる大きな頭部である。目と口は刺り貫き、耳・鼻・顎は粘土を貼り付ける。このうち両耳は欠けているが、その剥離痕から板状の大きなものであったと考えられる。頭には、被り物が表現される。被り物の正面は、幅広で二山の頂部をもち、中央には逆台形の刺り貫きがある。背面は頂部を欠くが、正面と同様の刺り貫きがあり、対称形であったと考えられる。被り物の形状と刺り貫きに沿って、2条1組みの沈線が施される。頬には、沈線によってやじり状の入れ墨が表現されている。

この楯持人埴輪頭部は、今回の調査において古墳周濠の底から単独出土した。その出土位置は、周濠の底でも外側への立ち上がり付近であった。楯部分の破片は全く見当たらない。想定されるのは、樹立されていた楯持人埴輪が倒壊時に、差し込み式の頭部のみが周濠へ転落したことである。ぬかるんだ滯水状態を示す周濠埋土からは、頭部が墳丘側から外側まで転がったとは考えがたい。おそらく、この楯持人埴輪は外堤上に樹立されていたのであろう。

Colum

8

羽子田遺跡
第11次

(14) 羽子田遺跡 第12次調査

所 在 地 田原本町大字新町61-1

調査面積 112m²

調査原因 分譲住宅の建築

担 当 者 藤田三郎・豆谷和之

調査期間 1998.2.4 ~ 2.10

遺 物 敷 4 箱

位置・環境 今回の調査地点は、遺跡の東部にあたる。本地の東側隣接地の警察署建設にあたっては、橿原考古学研究所によって試掘調査がおこなわれているが、遺構は確認されていない。

また、北西部の用水路整備に伴う調査では、江戸時代の水路を確認し、埴輪から近世陶磁器までの雑多な遺物が出土している。

検出遺構

- ・古墳時代前期：堅穴住居
- ・古代 : 大溝
- ・中世・近世 : 溝・落ち込み

出土遺物 土師器、埴輪、須恵器、瓦器

まとめ 本調査地の大半は、近世以降の落ち込み状遺構によって失われており、遺構が存在するのは、調査対象地の西端に位置する第2トレンチ部分のみである。また、本地周辺の地形からしても、この第2トレンチ付近が微高地の縁辺と推定されることから、遺跡の東限を確定できたといえよう。

古墳時代前期の遺構として、本遺跡で初めて方形プランになると考えられる堅穴住居跡を検出した。住居跡は1つのコーナー部分のみ確認したため、規模等は不明である。側溝のところから鉢の完形品が出土している。

古代・中世の遺構として、人溝を検出した。人溝は、微高地の東辺に沿うように掘削されており、現水路ともほぼ並行している。近年、古代の道路側溝と考えられる溝が羽子田遺跡の数箇所の調査で確認されており、東西の斜行道路が遺跡を横断するように走行していることが認識されつつある。今回の大溝も、南北方向の斜行道路の側溝、あるいはそれに関連する遺構の可能性がある。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 第2トレンチ全景



3. SB-2101遺物出土状況

(15) 羽子田遺跡 第13次調査

所在地 田原本町298-1、299-3他

調査面積 260m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 豊谷和之

調査期間 1998.3.2 ~ 3.16

遺物量 1箱

位置・環境 羽子田遺跡の調査も、今回で13次を数える。このうち、第3・4・6・7・9・10・11次調査では、古墳周濠や埴輪を確認している。これら一連の調査から、羽子田遺跡が4世紀後半と5世紀後半～6世紀前半の2時期にピークをもつ古墳群地帯であったことが判明した。また、第6次調査や第12次調査では、古墳時代前期の井戸や住居跡が検出され、その時期の集落の存在も想定されるようになった。

本調査地は、羽子田遺跡の推定される遺跡範囲の南限であり、今まで行ってきた羽子田遺跡の最も南側の調査となった。

検出遺構 • 古墳時代前期：溝（SD-101）
• 中世 : 井戸1基、素掘小溝

出土遺物 調査区南端で検出した古墳時代の溝（SD-101）から、木製鋤の把手部分が出土した。最下層からは摩耗した弥生土器が出土しているが、流されてきたものであろう。

素掘小溝からは、瓦器塊などが出土している。素掘小溝は、中世遺物包含層である灰粘が上面を覆い、中世以降に下るとは考えられない。溝方向はほぼ南北方向である。

まとめ 今回の調査により羽子田遺跡の、特に古墳群の南限は限定されたと考えられる。また、中世の耕作に伴うと考えられる素掘小溝は東西方向をとる。羽子田遺跡第5次で検出した黒色土器を伴う素掘小溝は、東へ約45度振った、いわゆる斜行条里である。羽子田遺跡では、条里と斜行条里の小溝が入り混じっている。これが、地形に基づくものか、それとも時期差なのかは、いまだに不明である。周辺地域でのデーターの蓄積が必要となろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 中世素掘小溝の完掘状況（南西から）



3. 古墳時代溝の完掘状況（北から）

ヨノキ (16) 小阪榎木遺跡 第1次調査

所在地 田原本町大字小阪356

調査面積 80m²

調査原因 農業用倉庫の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.2.18~3.17

遺物量 18箱

位置・環境 遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。小阪池の西側の100m四方に周囲より一段高い畠地が散在しており、これが中世豪族館跡であるとみられていた。ただし、中世の文献資料等からはここに所在した豪族の名を知ることができない。

遺跡周辺には中世を中心とする遺物の散布が顕著に認められていたが、発掘調査を行うのは今回が初めてとなる。調査は、畠地の西側に隣接する水田で行われた。その位置から、居館の西側を区画する溝が検出されることが予想された。

検出遺構 館関連の遺構としては、中世末の大溝2条・小溝1条・井戸2基が検出された。大溝は南北方向で、東側のSD-51が幅2.4m、深さ0.4m、西側のSD-52が推定幅4m以上、深さ1.1mをはかる。この他、古墳時代のL字形の溝が1条検出された。

出土遺物 SD-52から多くの瓦質土器、土師器等が出土した。瓦質土器には、攢鉢、火鉢、仏花瓶などがみられた。また、輸入陶磁器の青磁碗・白磁碗も出土している。時期は15世紀後半~16世紀前半ごろと考えられる。SD-51の掘削は、下層の瓦器塊から13世紀ごろで、15世紀には再掘削がおこなわれている。井戸からは瓦質大鉢の底部を打ち欠いた井戸枠が出土した。

まとめ 今回の調査により、この遺跡が中世豪族居館跡であることが確認された。

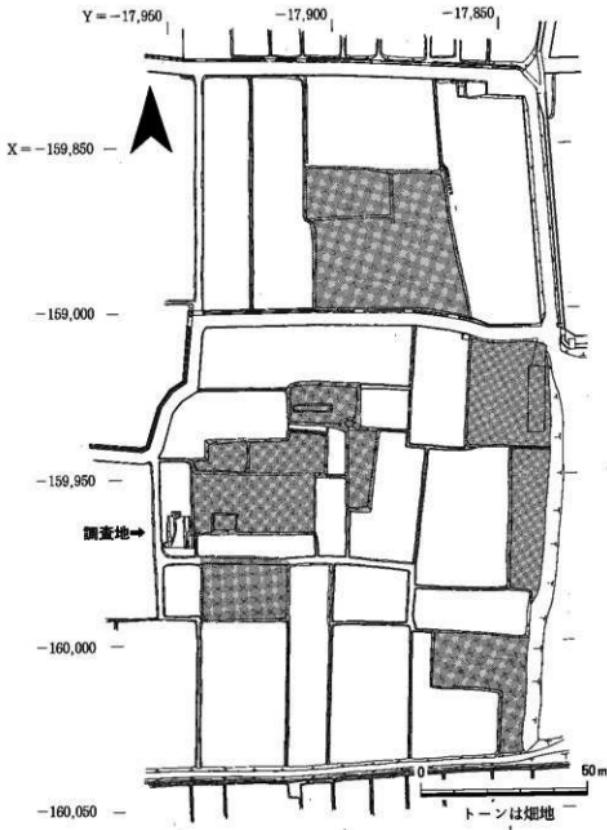
SD-51の埋土には焼土が多く含まれ、周辺の柱礎石にも焼けたものが多くみられる。従って、この居館は16世紀の初めには廃絶していると考えられる。



2. 調査地全景（北から）



3. 井戸枠検出状況



文献に残らない豪族の居館

小阪榎木遺跡は、宅地開発等の影響が少なく、現在でも一段高い畠地として居館の形跡が残る。さらに、条里に合わない地割や地目から居館の範囲や大溝の位置を考えることが可能で、南北200m、東西180mが外濠を含めた遺跡の範囲として捉えられる。特に中央西側の畠地では遺物散布が顕著で、居館の中心となると考えられる。

小阪榎木遺跡の周辺では、西方300mの小坂氏（小坂里中遺跡）、北方400mの法貴寺丹波氏（法貴寺丹波山遺跡）、北西方600mの唐古南氏（唐古・鍵遺跡の西端部）などの居館が初瀬川沿いに散在し、法貴寺を盟主とした長谷川党を形成している。このような地理的条件から、小阪榎木遺跡も同様の性格の豪族が所在したと考えられる。

Colum

9

小阪榎木遺跡
第1次

(17) 柿ノ森遺跡 第1次調査

所 在 地 田原本町大字阪手942-2東隣接地他

調査面積 115m²

調査原因 水路改修

担当者 豆谷和之

調査期間 1997.12.3 ~12.4

遺 物 量 1箱

位置・環境 柿ノ森遺跡は、大字阪手と大字大安寺の境に位置する。田原本ジャスコ店の東側にある阪手二丁池から道を挟み、さらに東側の島畑、資材置き場がこれにあたる。周囲の水田より一段高くなつたこの島畑を中世豪族居館の痕跡と見做し、「多聞院日記」に記述される柿森氏の居をこれにあてる考えがある。

この中世豪族居館の痕跡と見做される島畑の西側、大字阪手と大字大安寺の境となる水路部分の改修が行われることになった。水路部分が中世豪族居館の濠跡である可能性が強いため、調査を行つた。

検出遺構 • 時期不明：小溝2条（SD-101, 102）

出土遺物 中・近世の遺構は全く、検出されなかつた。ただし、既存水路の底面から、コンテナ半分程の近世陶磁器類が、ガラス瓶やビニールに混じって出土している。近辺に近世遺構の存在が窺えよう。中世の遺構検出面になると考えられる暗褐色粘質土には遺物を含んでいなかつた。また、その直下の灰粘を遺構面として、2条の小溝を検出しているが、遺物は含んでいなかつた。

ま と め 今回の調査では、当初考えていた中世豪族居館の濠跡は検出されなかつた。濠跡は、より島畑によつた部分であると考えざるをえない。ただし、既存水路の底部に近世陶磁器類が一定量混じることから、それほど離れず近世の遺構が検出される可能性はある。

また、暗褐色粘質土の直下から検出された2条の小溝については、遺物を含まないため時期は不明である。暗褐色粘質土が中世の遺構面と考えられるところから、それ以前の遺構と考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南から)



3. 遺構完掘状況 (北西から)

(18) 柿ノ森遺跡 第2次調査

所在地 田原本町大字大安寺271-1他南隣接地
調査原因 水路改修
調査期間 1998.1.26～2.6

調査面積 150m²
担当者 清水琢哉
遺物量 10箱

位置・環境 今回の調査は、遺跡推定範囲の北端で行われた。水路改修に伴う調査であり、調査区の形も現状の水路の形に沿って複雑に屈曲している。調査区は延長約60m、幅2.5mである。

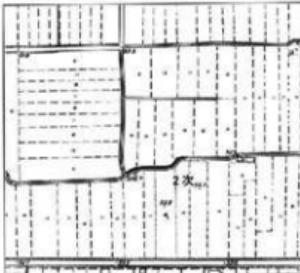
検出遺構 中世末～近世の大溝1条・小溝6条、古代の土坑1基、弥生時代後期後半の溝1条を検出した。中世の大溝は幅8m、深さ0.9mをはかる。また、弥生時代の溝は幅4m、深さ0.8mをはかり、杭列による堰を伴っていた。

出土遺物 中世の大溝から、瓦質土器、土師器羽釜等が出土した。木製品では、漆器椀が1点出土している。

弥生時代の溝からは甕の破片が出土した。

まとめ トレンチ幅2.5mの中でトレンチと同一方向の大溝を調査したため、溝の性格や規模は把握できなかった。現状で溝幅8mと推測されること、また、大溝の時期が16世紀頃のものと考えられることから、柿森氏の館関連の遺構である可能性は充分考えられる。今後の周囲の調査によりさらには検証していく必要があろう。

今回の調査結果でもう1つ重要なことは、弥生時代後期後半の堰を検出したことである。使用されている杭は、割り材の先端を削っただけのものが中心で、その状況は西側600mで検出された阪手遺跡の堰と類似しており、近くに水田が存在した可能性が高い。なお、出土土器には、黒褐色を呈し、角閃石を含む三輪山付近の胎土とみられるものが過半を占める。これは付近で使用されたのではなく、上流から流されたのであろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）



3. 中世大溝遺物出土状況（南から）

(19) 多新堂遺跡 第2次調査

所在地 田原本町大字多84束賜接地

調査面積 120m²

調査原因 道路建設

担当者 清水琢哉

調査期間 1997.11.25~12.5

遺物量 1箱

位置・環境 多新堂遺跡は、標高52m前後の沖積地に立地する。北西には多遺跡が隣接している。

多新堂遺跡の最初の調査は多遺跡第9次調査として行われた。このとき検出された中世遺構と遺物、周辺の小字名「小垣内」「大上院」などから中世寺院の存在が想定された。そのため、新たな遺跡としての認識から、遺跡名称が与えられたものである。

今回の調査は、多新堂遺跡の中央西寄りで行われた。

検出遺構 中近世素掘小溝多數、中世大溝1条が検出された。近世の素掘溝は東西方向で、中世の素掘溝は北西—南東方向であった。

中世大溝は、北北西—南南東方向で、深さ0.9mをはかる。調査区外に拡がるため、幅は不明である。遺物がきわめて少ないと、詳細な時期決定はできなかった。

出土遺物 中世大溝から少量の須恵器・瓦器塊が出士した。ただし、いずれも小片で、詳細な時期をおさえることはできない。

まとめ 今回の調査により、調査地一帯は遺構が希薄であることが明らかとなった。北西隣接地で行われた第1次調査では中世大溝が多く検出されていることから、第1次調査地周辺が中世集落の南端となることが予想される。

中世素掘溝の多くが条里方向と合致していなかった。西側70~80mには筋造道推定地があり、この付近では中世まで斜行条里が存在していたことが判明した。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（南から）



3. 中世大溝完掘状況（南から）

(20) 秦庄遺跡 第2次調査

所在地 田原本町大字宮森149-1他

調査面積 30m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 1998.2.10~2.16

遺物量 1箱

位置・環境 秦庄遺跡は、大字秦庄から宮森にかけて所
在する遺跡である。樋原考古学研究所による
第1次調査では、古墳時代後期を中心とする
集落が検出されたほか、绳文時代の遺構も検
出されている。今回の調査は、第1次調査地
の南東150mに位置することから、当該期の
遺構が検出されると予想されていた。

検出遺構 中世の土坑2基・井戸1基と素掘小溝群
が検出された。土坑は、南北1.4m・深さ0.4
mの方形のもの、南北1.6m・深さ0.25mの
方形のもの各1基で、いずれも西側が調査区
外に拡がるため東西幅は不明である。また、
井戸は径1.6m前後、深さ1.1mをはかる。

なお、調査地全体が南北方向の自然流路内
であったが、遺物を含んでいないため、時期
を明らかにできなかった。

出土遺物 中世土坑から、12世紀後半~13世紀前半
とみられる完形の瓦器塊が2点出土した。
また、井戸等から瓦器塊・土師器小皿等が出土
した。

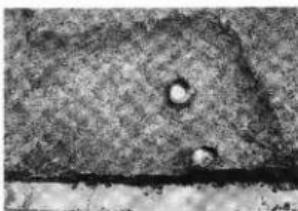
まとめ 今回の調査では、中世の土坑3基と耕作関
連の小溝数条を検出した。第1次調査で検出
された古墳時代の集落に隣接する遺構は全く
検出されず、本調査地まで集落は拡がってい
ない可能性が高い。ただし、調査面積が狭小
だった上、調査地全体が時期不明（弥生時代
~古墳時代？）の流路内であったことから微
高地の縁辺とも考えられ、今後、周辺の調査
により集落範囲を確認する必要がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 中世土坑遺物出土状況

(21) 田原本寺内町遺跡 第1次調査

所在地 田原本町555他
調査原因 イベント広場建設
調査期間 1997.7.29～9.5

調査面積 274m²
担当者 清水琢哉
遺物量 12箱

位置・環境 田原本寺内町遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡の範囲は現在の田原本町中心街とほぼ一致する。寺内町の成立は、平野長泰が17世紀初頭に教行寺を誘致したことに始まるといわれるが、遺跡としてはそれ以前に遡るものと考えられる。文献からは、寺内町成立以前のその範囲内に小室集落、田原本城館、楽田寺周辺の環濠集落が復元されている。また、近世には田原本城館跡に平野氏の陣屋が築かれる。

今回の調査地は、寺内町遺跡の南西部に位置する。

検出遺構 調査では、中世素掘小溝、中世後半の大溝、近世初頭の大溝、近世末～近代の大溝・土坑を検出した。

調査地西半で検出された中世素掘溝はいずれも南北方向で、遺物から14世紀前後の時期と考えられる。

近世末～近代には、南北方向の大溝が調査区西端で、東西方向の大溝が調査区南端で検出された。いずれも肩部のみの検出であり、深さ、幅等は明らかでない。

出土遺物 中世大溝からは、土師器皿、羽釜、瓦質摺鉢、天目茶碗、青磁、牛骨?などが出土した。

近世初頭の大溝からは、土師器皿等が出土しているが、遺物量は少ない。

このほか、近世末～近代の遺構から多量の陶磁器・ガラス瓶等が出土している。

まとめ 今回の調査では、初めて寺内町遺跡関連の遺構・遺物を検出することができた。また、寺内町成立以前にも大溝による区画が存在したことが明らかとなった。



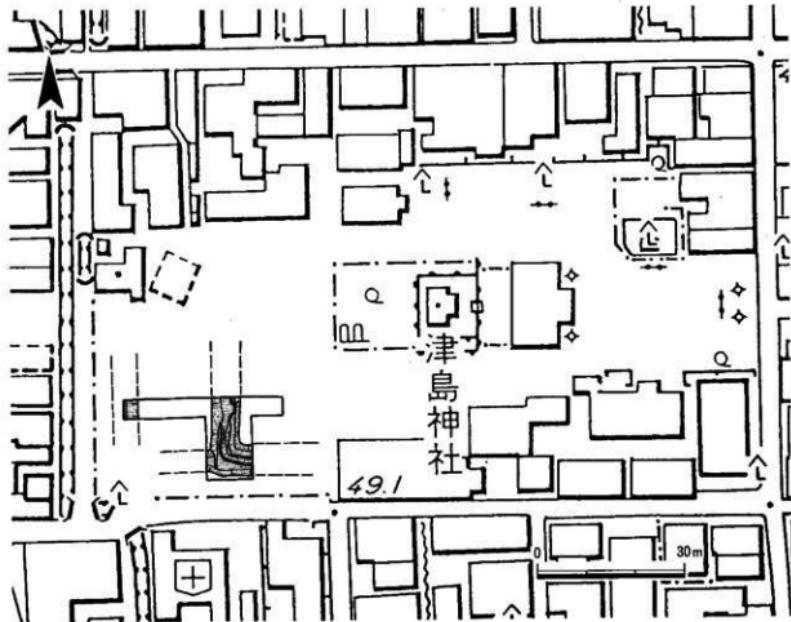
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）



3. 中世大溝完掘状況（南から）



田原本寺内町の形成

1595年に田原本に封じられた平野長泰は、1602年、教行寺に寺内町を造営させて統治を委ねた。しかし、2代目の長勝が田原本に陣屋を築くことになると、統治権を巡る争いから教行寺は退去を命ぜられ、その跡地に淨照寺・本誓寺の2寺をおいた。寺内町として成立した町並は、そのまま陣屋町として発展することになる。

第1次調査では、寺内町成立以前の中世の大溝と寺内町成立時と考えられる近世初頭の大溝を検出した。16世紀の遺構としては、東南部のコーナーを区画する大溝を検出した。南北方向の大溝の規模は、幅6m、深さ1.5mをはかる。

17世紀前半の遺構としては、西側の環濠と推定される南北方向の大溝1条（幅不明、深さ1.5m）を確認した。また、16世紀の溝も再掘削（幅5m、深さ1.2mに縮小）され、さらにこの溝は西側に延長され、平面「L」字形のプランとなる。そして、南北方向部分はまもなく埋没するようである。

近世後半以降は、17世紀の大溝の外側に二重目の大溝を掘削された。これは、戦後に暗渠工事が行われるまで存続した。

Colum

10

田原本寺内町遺跡

第1次

(22) 田原本寺内町遺跡 第2次調査

所 在 地 田原本町字大門町38

調査面積 70m²

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之

調査期間 1998.1.20~1.26

遺 物 量 1箱

位置・環境 今回の調査地は、第1次調査地から南東へ250m離れた、田原本町第一体育館の西隣接地の宅地である。本調査地と田原本町第一体育館の間を流れる水路は、寺内町成立以前に形成されていたと考えられる楽田寺周辺の環濠集落の西側環濠の痕跡との推定がなされている。

検出遺構 • 近世：大溝（SD-101）1条

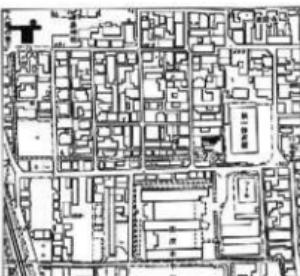
粘土探掘坑（SK-01、02）2基

• 近代：竈状遺構（SX-01、02）

出土遺物 調査区の東端で検出した南北の大溝（SD-101）からは、近世陶磁器類が出土した。溝の再掘削に伴う遺物と考えられ、最初の掘削時期を知る遺物は得られなかった。

竈状遺構は、焼土面をもつ円形土坑が2基並列したものである。円形土坑には灰の搔き出し口がつき、その両肩に瓦が立てられていた。搔き出し口を保護する目的で立てられたものであろう。瓦は近世のものである。また、搔き出し口の前面は、方形に塗喰のはられた作業面があった。

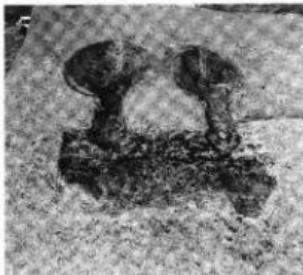
まとめ 検出された遺構は少ない。特に、調査区西側は、瓦粘土の採掘が行われ、ほとんど遺構面を残していなかった。付近で江戸時代に瓦作りが行われていたと想定される。大溝（SD-101）については、中世に遡る確実な資料を得られなかった。楽田寺周辺環濠集落の有無については、今後の調査の課題となった。竈状遺構はその検出面から、江戸時代末～明治時代にかけての遺構と考えられる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景（東から）

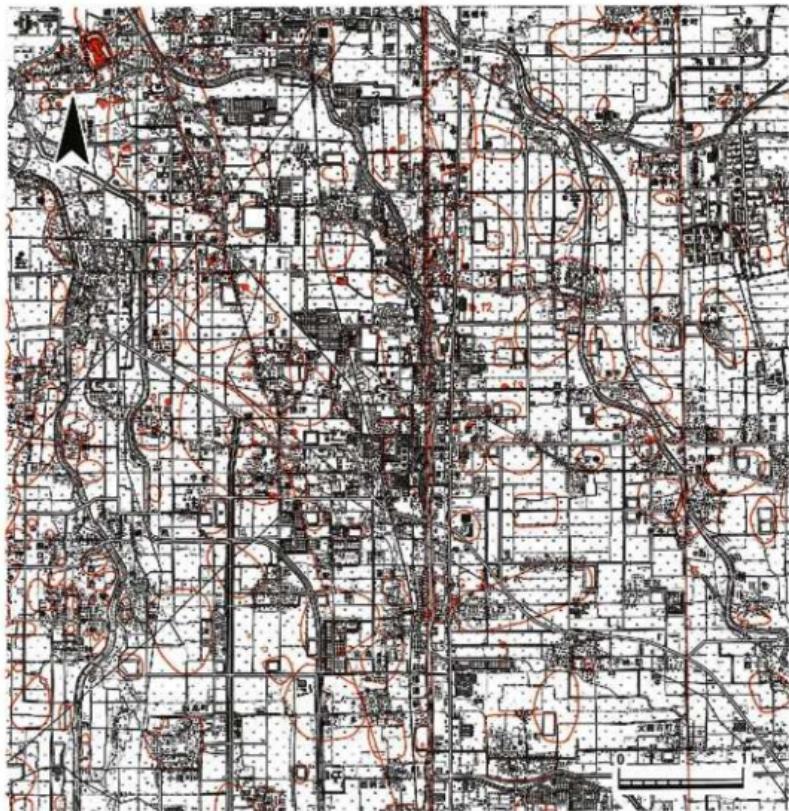


3. 竈状遺構の検出状況（南から）

III. 試掘調査・立会調査の概要

1997年度に田原本町の行った試掘調査は3件である。Aの西竹田遺跡は、環濠集落内部での調査であり、中世造構が濃密に分布することが明かとなった。Bの十六面・薬王寺遺跡では、弥生時代後期の河跡が拡がっていることが確認された。Cの千代遺跡では明確な造構・遺物を確認するには至らなかった。

1997年度に行った立会調査は17件である。このうち、唐古・鍵遺跡で行った擁壁工事に伴う立会調査(1)では、掘削が弥生時代の遺物包含層に達し、弥生時代前期～後期の遺物が出土した。また、唐古・鍵遺跡の南側で行った立会調査(2)では、自然河道を挟んで微高地が存在することが判明した。弥生土器や埴輪の散布にもみられることから、唐古・鍵遺跡の墓域、あるいは古墳が存在する可能性も考えられる。



田原本町の遺跡と試掘調査・立会調査地点

第3表 1997年度 試掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	選選番号 (田教文)	選選日	調査日	内容
A	西竹田遺跡	田原本町西竹田 156-1	吉川 繁	個人住宅建築	337	97. 2. 26 ~ 4. 9	97. 4. 8 ~ 4. 9	南北2m、東西3mの試掘坑を設定。縄文時代・室町時代の構が検出された。
B	十六面 ・薬王寺遺跡	田原本町薬王寺 344-1	梅田義一	青空駐車場	235	97. 10. 23	97. 11. 18	1.5m×2mの試掘坑を5ヶ所設定。全体が弥生時代後期の河原内とみられる。
C	千代遺跡	田原本町千代 1115-1他	岡崎靖郎	共同住宅建築	170	97. 8. 25	97. 12. 1	4m×4mの試掘坑を3ヶ所設定。中世の土器片少量出土。遺構はみられない。

第4表 1997年度 立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	選選番号 (田教文)	選選日	調査日	内容
1	唐古・鏡遺跡	田原本町鏡 310-1他	竹村敏子	青空駐車場	49	97. 5. 7	97. 5. 9	西側掩壁部分で立会。南北23.2m、幅16m、深さ0.5mの掘削で、多くの弥生土器片の出土がみられた。北側では弥生前期の落ち込み中央では弥生中期の層、南端では弥生後期の構が確認された。
2	西竹田遺跡	田原本町西竹田 97-1他	中川好夫	植庭ハウス建築	200	97. 10. 14	97. 5. 13	掩壁基礎掘削時に立会。唐古した土器片小片出土。
3	千代遺跡	田原本町千代 867-2他	吉井清野	共同住宅建築	35	97. 4. 30	97. 6. 10	掘削が客土の範囲内であったため不明。
4	坂手北遺跡	田原本町坂手 368-1他	松村吉清	事務所建築	34	97. 4. 30	97. 6. 25	掩壁基礎掘削時に立会。遺物・遺構とともに認められない。
5	下ッ道	田原本町今里206	船井 勲	共同住宅建築	89	97. 6. 23	97. 7. 29	2m×1mの試掘坑を設定。寺川の氾濫原とみられる。
6	遺物散布地 (県遺跡地図 11-A-065) 周辺	田原本町西代 105-1他	田原本町長	暗渠排水の設置	—	—	97. 8. 14 97. 11. 19 97. 12. 15	暗渠掘削部分ならびに水路工事部分で立会。庵治池の南60m付近に旧河道。
7	下ッ道	田原本町東庄 578-1	全 男	個人住宅建築	303	97. 1. 20	97. 10. 9	客土内での掘削で遺構の有無は不明。
8	十六面 ・薬王寺遺跡	田原本町保津 222-1	ダイケン㈱	資材置場	123	97. 7. 23	97. 10. 20	西側掩壁部分で立会。既にコンクリートがうたれていたため、遺構の有無は確認できなかった。
9	新道	田原本町宮森 100-75	赤松孝悦	個人住宅建築	143	97. 8. 5	97. 10. 20	客土内での掘削で遺構の有無は不明。
10	保津 ・宮古遺跡	田原本町宮古 224-5	竹村宏子	個人住宅建築	231	97. 10. 21	97. 10. 22	東側掩壁工事部分で立会。近世以降の南北溝検出。

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進捗番号 (田牧文)	進捗日	調査日	内 容
11	金剛寺遺跡	田原本町金剛寺 303-2 北側道路	田原本町長	水道管埋設	211	97. 9. 30	97. 11. 19	道路面から1.3mの掘削。遺構・遺物とも確認できなかっ た。
12	唐古・健達跡 周辺地	田原本町健 140-1 東側 道路他	田原本町長	通学路整備	-	-	97. 11. 4 ~11. 7	水路工事部分で立会。自然河 道検出。弥生土器・埴輪出土。 河道南の微高地に墓塚が存在 する可能性あり。
13	阪手東遺跡 周辺地	田原本町阪手 93-1 西側水路	田原本町長	水路改修	-	-	97. 12. 9	水路工事部分で立会。深さ0.8 mの掘削であるが遺構・遺物 とともに確認できなかっ た。
14	保津・宮古遺 跡周辺地	田原本町保津 45-1 西側水路	田原本町長	水路改修	247	97. 10. 31	97. 12. 9	水路工事部分で立会。興文時 代とみられる遺物含蓄あり。 遺構はみられない。
15	黒田遺跡	田原本町宮古 642-1 南側水路	田原本町長	水路改修	249	97. 10. 31	98. 1. 10	水路工事部分で立会。深さ0.8 mの掘削で、地山には薬剤が 及んでいない。遺構・遺物と もに検出されず。
16	千代遺跡	田原本町千代 245東側水路	田原本町長	水路改修	244	97. 10. 31	98. 1. 13	水路工事部分で立会。遺構・ 遺物ともにみられない。河道 堆積とみられる。
17	平田カイト遺 跡	田原本町平田 163-2 他	東田至弘	青空駐車場	322	97. 12. 9	98. 3. 20	掘削を伴わない工事のため遺 構・遺物の有無は確認できな かった。

田原本町埋蔵文化財調査年報 7
1997年度

平成10年3月31日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 明新印刷株式会社

